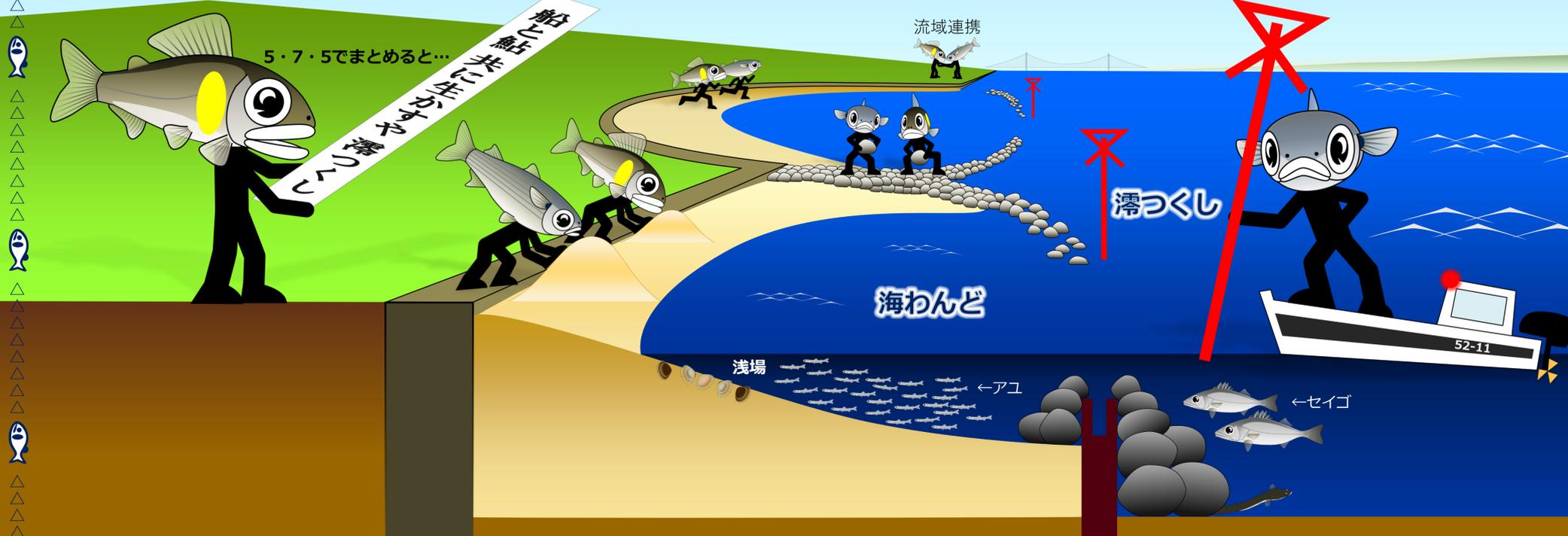


大阪ベイエリアに生きるアユのための海わんどと滞つくし

いのちをつなぐ水と流域 地球市民対話プロジェクト 京の川の恵みを活かす会 副代表
 地域対話フォーラム2024 in Osaka
 2024年3月2日(土) 10:30~16:30
 中筋 祐司

4 淀川のアユを増やすために、大阪ベイエリアでの提案

探求と考察から、大阪ベイエリアに生きるアユ仔稚魚にとって、潮流が緩やかになる石積みなどで困った「海わんど」があれば、**定着率がUP**し、捕食者セイゴが居着きにくい砂浜などの**浅場**があれば、**生存率がUP**すると考えられた。水運で繁栄した歴史のある大阪では、浅場で座礁しないために、航路標識である「滞つくし」が設置されてきたが、これが機能すれば、淀川のアユを増やすことにつながっていく。大阪市の市草である「滞つくし」を、人と自然との共生を示す象徴(シンボル)と捉えることで、流域連携など活動の輪が広がってほしいと考える。



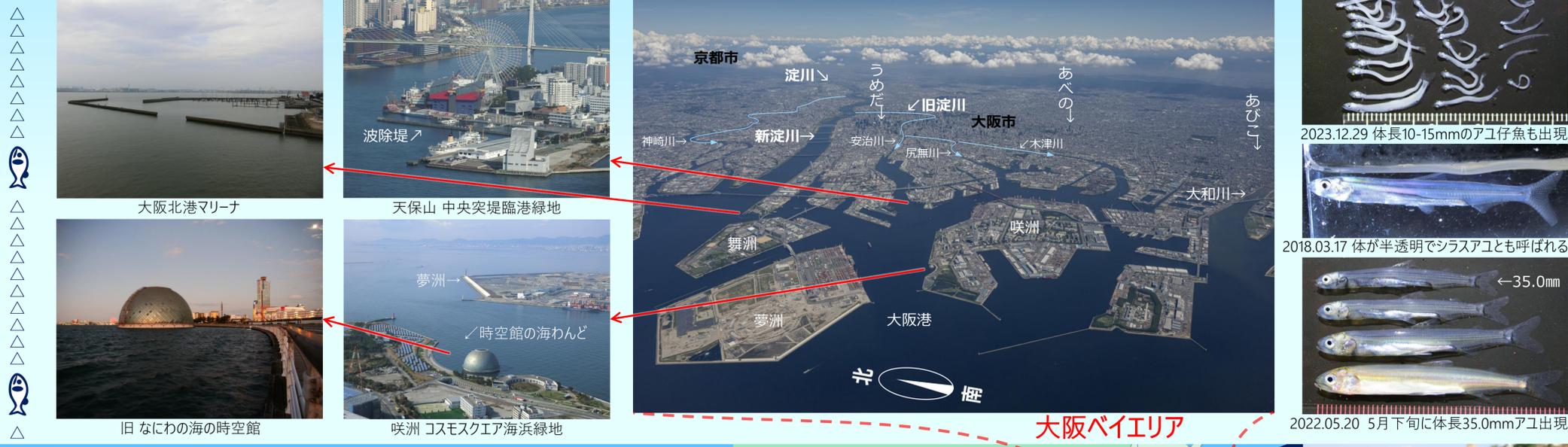
3 大阪ベイエリアにおけるアユ成育場の考察

大阪ベイエリアのアユ仔稚魚は、①直線状の直立護岸沿いよりも、潮が緩やかに通り抜け、波が穏やかな②港内やワンド状の直立護岸沿いに多く定着していた。アユ仔稚魚は、遊泳しながらも潮流に運ばれるが、潮流が滞る奥まったところへは、運ばれていくことなく、定着には至らないと考えられた。しかしながら、居場所として選択した②港内やワンド状の直立護岸沿いには、セイゴ(スズキの幼魚)が居着いていることが多い。アユは、セイゴと同じ環境に居合わせることとなり、捕食される様子が多く見られ、アユの成育場としては、決して好ましい環境ではないと考えられた。



2 謎を解くために、大阪ベイエリアの水面下を探求

冬の夜の大阪ベイエリアの探求を続け、2017.12.09、大阪北港マリナにおいて、最初のアユ1尾を発見した。それは、夏の夜の四万十川で釣った、最初のアカメ1尾と同じくらいの感動でもあった(アユ2.8cm=アカメ85cm)。その後、30箇所以上を調べ、大阪・関西万博会場の夢洲に隣接する咲洲や舞洲、天保山、ユニバーサルシティポートでも確認した。アユ仔稚魚の出現数が多い箇所を中心に調査を毎年継続し(施設管理者の許可を得て実施)、結果、年・場所によって違うが、10~5月、大阪ベイエリアで成育し続けていることが明らかになった。



1 淀川のアユ、そして、大阪ベイエリアのアユの謎

アユ仔稚魚にとって、波打ち際などの浅場は重要な成育場であると日本各地から報告されている。大阪ベイエリアへ流れ込む淀川には、毎年3~6月、約3万~163万尾のアユが遡上しているが(2012~2023年 国土交通省淀川河川事務所)、大阪ベイエリアは、埋立地が広がり、大部分を直立護岸が占めている。冬の間に、大阪ベイエリアのどこに、アユ仔稚魚の過ごす場所があるのだろうか?

